
発展学習01-5 行動の予測、予言、予想

第1章で「行動分析学は予測と制御（影響）に役立つ説明を目ざす」と述べたことについて、

- ・行動の予測、予言、予想はどう違うか
- ・予測とは何をすることなのか
- ・予測することによってどういうメリットがあるのか

といった質問がありました。

まず、『大辞泉』でそれぞれの違いを調べたところ、

- ・「予測」はなんらかの根拠に基づいて推測することで「景気の動向を予測する」「年金制度の将来を予測する」「株価予測」など数字的なものに基づく場合が多い。
- ・「予想」は前もって見当をつけること、また見当をつけた内容を意味し、広い範囲に用いられる。
- ・「予期」はあらかじめ期待・覚悟する点に重点があり「彼はやがて訪れる死を予期していた」「彼女が現れることを予期していなかった」「予期せぬ出来事」などのように使う。

などとなっていました。上記には挙げられていませんが、「予言 prophecy」というのはどちらかというと宗教的な意味で使われるように思います。またいつ起こるか分からない現象については、地震のように「予知」という言葉が使われることもありますね。

いずれにしても、これらの言葉は、これから先がどうなるかという意味に用いられているように思われます。

しかし、行動分析学でいうところの「予測」というのは、将来こうなるだろうという先のことを関心対象としているわけではありません。むしろ、

- ・これこれという条件が揃った場合にはこの行動はこういうふうに変化するであろう

という意味であり、将来の予測ばかりでなく、過去の行動現象を説明したり、そのような変化を必要とする際にどういう条件を揃えればよいかという情報を提供したりすることに目的があります。

重要な点は、単に将来こうなるであろうではなくて、変化をもたらす条件（オペラント行動であればそれを強化・弱化する随伴性）を明らかにすることにあります。ですので、条件が揃わなければ当該の変化は生じません。一生起こらない可能性もあります。いっぽう、条件が揃った場合（もしくは人為的に条件を揃えた場合）は、具体的な行動予測となりの中させることができるようになります。

ちなみに、時たま「予言破り」が議論されることがあります。例えば、ある人を取りまく環境や先行要因を精査した上で、「A、Bという選択肢が与えられた時には、この人はAを選ぶだろう」と予測したとします。その予測的中率は高いはずですが、そのように予測されていることを知った後には、敢えてヘソを曲げてBを選ぶかもしれません。しかし、だからといって、当初の予測が不正確であったということにはなりません。当初の予測は、当人が予測されていることを知らないという条件のもとで行われたものであり、当人がそれを知ってしまった後にはそのことが予測の前提に新たに付け加わってしまいます。その場合、

- ・この人は、自分の行動が予測されていたとしても、それを気にせずに振る舞う
- ・この人は、自分の行動が予測されていた時には、わざと想定外の行動をとる

のいずれかの傾向があるのかを斟酌した上で新たな予測をしなければなりません。

もう1つ、

- ・これこれという条件が揃った場合にはこの行動はこういうふうに変化するであろう
- とは言っても、環境は常に変化しており、条件の組み合わせは無限となりますので、100%同じ条件が揃うことはあり得ません。ですので、実際の予測は常に確率的であり、決定論的な予測にはなりえない点にご留意ください。